



拉致監禁小説  
～絶命の部屋～

天 詩 人

# 絶命の部屋

---

7月13日、僕は自らの命を絶った――

あれは、とても暑い日だった。

僕が仕事から帰ると、アパートの前に見慣れない白いワンボックスカーが停まっていた。

トヨタだったか、日産だったか、車にあまり興味のない僕には分からなかった。

玄関を開けようと、靴から部屋の鍵を取り出そうとしていると、突然、何人かの男たちに羽交い絞めにされ、僕は気が動転してしまい、言葉にならない言葉を口にするだけだった。

手から落ちた靴から、ついさっき買ったばかりの雑誌とお気に入りのカフェラテ、使い慣れた万年筆などが地面に散乱したのを覚えている。

部屋の鍵はどこに行ってしまったのだろうか。

僕は強引に、成す術なく、ワンボックスカーに押し込められた。

車は僕を乗せるや否や、猛スピードで発進した。

八人乗りであろうワンボックスカーには、僕を入れて、ちょうど八人が乗っていた。

僕の両腕は、誰かも分からない男たちによって、がっちり抑えられている。

前のバックミラーから後部座席の男たちの顔が見える。

“誰なんだこいつらは？”

“一体、僕をどうしようというんだ？”

その時、僕は要約、この事態を理解した。

“これがあの拉致監禁か...”

僕には、後部座席の男たちの強張った表情が何かとてつもなく恐ろしく見えた。

「おいっ！ こんなことして、ただで済むと思っているのかよっ！」

僕の両腕は相変わらず、がっちりロックされている。

僕は半泣きになりながらも、「ふざけんなよ！ 犯罪だろ！ 放せよこの！」と必死で訴えた。

車内で口を開こうとする者は一人もいない。うっすらとかかっていたラジオだろうか、小田和正の歌が妙に切なく聞こえ、本当に泣きたくなった。

「おいっ！ 何とか言えよ！ 絶対おまえら訴えてやるからな！」

その時、いきなり後ろから、思い切り頭を叩かれた。

「てめえの親から頼まれてんだよっ！ 犯罪な訳がねえだろっ！」

頭を叩かれたこともそうだが、「親...」と聞いた時に僕の動揺は決定的なものとなった。

車が走る約二時間。僕はもう完全に脱力状態で、文句を言う気力も失っていた。  
僕の両腕は、男たちの汗で濡れていた。

“一体、ここはどこだ...？”

見慣れない景色だが、間違いなく片田舎の方に来ているのは分かった。

もう外も暗くなっていた。

要約、車が停まると、両腕を完全に抑えられた状態で、更にそんな僕を男たちが二重に取り囲むようにして、マンションの入り口になだれ込む様にして入った。

辺りに人気もなく、叫ぶ気力も僕にはなかった。

エレベーターに押し込められると、最上階の六階のボタンが押された。

男たちの呼吸が更に荒くなっているのを感じる。

エレベーターのドアが開くと、また見知らぬ男たちが数人いて、更に嚴重に僕を取り囲みながらドアの開いていた606号室に入ることになる。

それ以降、僕がこの606号室を出ることは二度となかった。

しかしこの時、そんなことを考える余裕も、僕には微塵もなかったのである。

606号室には、僕の両親と親戚のおじがいて、他にも知らない顔が幾つもあった。

それから、僕の短いようで長い、闘いの日々が始まったのだった。

僕の信仰を頭から徹底的に否定する両親とおじ、僕の教会と尊敬している教祖様を“完全な悪”として、罵詈雑言の限りを尽くすキリスト教の牧師、そして強制改宗をビジネスとしてやっているらしい連中、みんなが寄ってたかって、来る日も来る日も僕に悪態の限りを尽くした。

僕をこんな目に合わせた両親に対する苛立ちや怒りはもちろんあった。

しかし、まだ子を思う親の気持ちを僕も一応は汲み取ることが出来た。

僕が何よりも許せなかったのが、本来、愛を説き、実践に努めるべき筈の牧師とこんなことをお金をもらってやっている、つまり金儲けのためにやっている改宗屋の連中だ。

奴等は容赦なかった。

「おまえは、本当に人間のクズだな。  
原理（僕の教会の教えのことを指す）で完全に頭がイカレてるよ、このクズ！」

「いいか、てめえが教会を辞めなければ、絶対にここから出さないからな！  
どうせ、てめえがこのまま社会に戻っても、犯罪を犯して、人様に迷惑掛けるだけだからな！」

“一体、僕がどんな犯罪を犯したというのだろうか？”

“僕は、信仰を持つ前もそうだったが、今ももちろん酒やタバコはやらない。

職場では、誰にも負けないくらい会社のために働き、  
週末には、地域の清掃活動にも積極的に参加していた”

“これも教会の教えの中心である『為に生きる』を実践しているだけなのだ”

“僕がいつ、どんな犯罪を犯したというのだろうか？”

“僕の周りの教会の友人たちなんて、僕以上に教会や社会に奉仕している。

僕の知っている先輩や教会の責任者の方々を僕は心から尊敬している。  
僕の知る限り、世の中の人たち以上に、この国のこと、これからの世界のことを考え、努力されている”

“それなのに、なぜこの連中は、こうも一方的に僕らを完全な悪だと決め付け、  
拉致監禁という、こんな手段まで用いて、人権を侵害するのだろうか？”

“自分たちを絶対的な善だと思っているのだろうか？”

“神の前に正しく、清い人たちが、果たしてこんなことをするだろうか？”

“僕らが完全な悪で、反社会的な違法集団だとすれば、この国の法が僕らを間違いなく裁くのだから、  
あんたたちの出る幕はないのに...”

「おいっ！ てめえさっきから何黙ってんだよお！  
ちったあてめえの頭で考えられるようになったのかよお！ このボンクラが！」

“僕は、ずっと自分の頭で考えてきた。人よりも考え過ぎる位、考えてきたと思う。  
自分について、人間について、人生について、宇宙について、そして、神について...”

“そんな中で、この教えと出会ったのだ。そして、もちろんそれからも考えてきた。  
古今東西、多くの人々の本を読み、また今を生きる多くの人たちの話を聞き、  
今も昔も変わらずに自分の頭で考え、自分の意志で決定しているのだ”

“それなのに、この連中は、洗脳されているだ、マインドコントロールされているだ、世間の情報を何も知らされていないだ... と、まるでこの連中が何かに洗脳されているようにしか僕には思えてならないのだ”

しかし、僕の話は全く聞いてもらえず、毎日毎日、朝から晩まで、時に食事さえも与えられず、僕は批判と否定の嵐の中に立たされ続けた。

時には暴力も振るわれた。時には顔に卑猥な本を押し付けられた。時には顔に唾を吐きかけられた。

そんな生活がもうどれくらい続いたのだろうか。

僕はもう、夜もまともに眠ることが出来ず、耳を閉じていても、嫌な幻聴が聞こえるようになり、精神が荒み始めた。

ストレスからだろうか、時々、小便に血が混じるようにもなった。

毎日、何の楽しみもない。

自分のしたいことは何も出来ず、自分のしたくないことばかりを無理矢理やらされる。

僕はもう疲れた。もう全てがどうでもいいように思えてきた。

いつ終わるとも分からないこの絶望の部屋で、生きていても何になるのだろうか。

僕には、もう考える力もない。

未来に希望を抱く力もない。ただ、部屋の隅でうな垂れているだけ。

極限状態の中での幻聴だろうか、“頑張れ...頑張れ...”という声が聞こえた気がした。

昔のことも色々と思い出された...

父とキャッチボールをしたこと...

「おまえは、父さんの誇りだからな」という言葉に何度、勇気付けられたことが...

あの友人との出会い...

彼がいなければ、僕は教会にはいない...

僕が彼を怨んでいるって？

僕を導いてくれた彼に、僕は心から感謝してるよ...

これまで...

僕に流された涙に、僕はどれだけ救われたことだろう...

僕も一人でも多くの人に希望と感動を与えられるような人になりたかった...

少しでも平和な世界を築くために力になりたかった...

だけど...僕はもう、限界です...

ついに僕は、トイレの窓から、人が何とか一人くぐれるトイレの窓から、この身を投げた。

——7月13日、僕は自らの命を絶った。

終

この物語は、フィクションではありますが、この物語の内容は、これまで43年以上にわたって、統一教会の信徒、4300名以上に実際に行われてきた拉致監禁の事実を基にしています。

1997年7月13日には、統一教会の信徒であった藤田孝子さん（当時27歳）が拉致監禁の最中、自殺という非業の死を遂げております。

藤田さんのご冥福を祈りながら、また二度とこのような事件が起こらないよう今回の作品を執筆させて頂きました。

この小説が、この拉致監禁という異常な犯罪行為への理解と解決の為の一助となれば幸いです。

## イマジン

---

皆様の確かな想像力と少しの行動力を信じています。

想像して下さい。

あなたは、久し振りに実家に帰って来ました。

あなたは、久し振りに家族と団欒しています。

すると**突然！**

あなたは、父親や兄弟から羽交い絞めにされ、

無理矢理に車に押し込められ、

一体、何処か分からない所に  
連れて行かれてしまいました...

何処か分からないマンションの一室には、  
中からは絶対に出られないように  
鍵が掛けられています。

あなたは、戸惑いと恐怖を覚えるでしょう。

怯えるあなたの前に、知らない人々が現われ、  
口々にあなたに向かって言います。

「バカ！」

「クズ！」

「自分の頭で考えろ！」

あなたは、こんなことを四六時中、  
毎日、毎日言われ続けるのです。

きっとあなたは、こう言うでしょう。

「ここから出してくれ！」

「こんなこと人権侵害じゃないか！」

「僕が一体、何をしたというんだ！」

しかし、そんなあなたに彼らはこう言います。

「おまえなんかに人権はないんだよ！」

きっとあなたは、絶望するでしょう。

いつ出してもらえるか分からない  
マンションの一室で、  
言葉の暴力を浴びせられ続ける...

時に、実際に暴力も振るわれ、  
あなたが女性ならレイプされることもあります。

いくら前向きなあなたでも、  
“自殺”を考えるでしょう...

こんなムナクソ悪い想像の世界に  
皆様をお連れしてしまっても大変申し訳ないのですが、  
この想像の世界が実は、



現実には起こっているのです。

このような想像上の体験ではない、  
実際の体験をしてきた、また  
現在もしている人がこれまでになんと...

**4300人以上**いるのです。

これはある特定の宗教、  
“統一教会”を信仰している人に  
現実には起こっている  
紛れもない事実なのです。

皆様の確かな想像力と少しの行動力を信じています。

すべては“知る”ことから始まります。

皆様の前には、“インターネット”という  
最高の武器があります。

“ワンクリック”で“知の扉”、  
“真実の扉”を開くことができます。

あなたが、あなたの家族が、  
あなたの友人が、あなたの知人が、  
身に覚えのない人が、罪のない人が、  
もし人権を侵害されていたら...

あなたは、見て見ぬ振りをする事が出来ますか？

ただ一人、黙っている事が出来ますか？

皆様の確かな想像力と少しの行動力を信じています。

そして、

皆様が知性と良識を備えた人であることを信じています。

さあ、“ワンクリック”から、  
“真実の扉”を開いて下さい。

皆様の少しの行動力を信じています。

拉致監禁小説 ～絶命の部屋～

<http://p.booklog.jp/book/26494>

著者 : tenshizin

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tenshizin/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26494>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26494>